# 「老い」を想う

## ―渦中に身を置く一人として―

村島義彦

### ＜はじめに＞

敬愛する先輩から耳にして、わが心にとりわけ響いたセリフが一つある。ほかでもない、「ざっと古希を過ぎると、各人の心境にも変化が生じて、ひとは、これまでの〝人の声〟よりは〝神仏の声〟がいっそう気に掛かり出すのではないだろうか・・・」なのだが、おそらく、自身の心の底での〝密かな変化〟を言い当てられ、思わぬインパクトを覚えたからにちがいない。ここにいう〝神仏の声〟は、あるいは、今は亡き〝ご先祖の声〟と言い換えられてもよいだろう。

渡る世間での現役の修羅に身を置くかぎり、あまたの同胞たちに伍して競い負けないためにも、つねに周りを意識して、売り込む機会があれば、すかさず行動に移す〝果敢さ〟をせっせと磨かないわけにはいかない。他者よりも目立つ、他者の前を走る・・・等々、つねに他者が念頭から離れない――これが、現役生活の偽らざる光景であろうか。つまりは「人の声」が気になって仕方がないのである。

けれども、一応は現役を済ませ、リタイアの境遇に身を委ねて日々を重ねていると、ざっと古希前後で、わが心境に思わぬ差が生じてきた。残された時間の目減りが意識され、頭髪の薄れさながら、かけがえのない時間をどう用いるのが悔いを残さない営みなのかに、おのずと思いが深まったからだろうか、しきりと、今のわたしのこの行為を、周囲の連中はともあれ、神仏ならばどう眺められるであろうか、と問わないではいられなくなったからである。あるいは、今は亡き父母（ないしご先祖）は、これを目にして、寂しげにそっと顔を曇らせないであろうか・・・と。

振り返れば、残された実働時間もそろそろ十年を切りはじめた。もはや世間を気にするより、自身の心に忠実に、偽りのない満足度にもっと軸足を置かないわけにはいかないな――これが、ごく素直に得心されたからであろうか、爾来、本当に意味がある〝と思われる〟ことの方を優先する、というスタイルが、かなりダイレクトに顔を覗かせるようになった。

そうしたスタイルを踏襲して、ここでの「老」をめぐる考察にも取り組んでみよう。すなわち、いわゆる学会向けの従来のスタイルに拘らず、もっと自由に、稚拙を承知で、思いのたけを率直に披歴してみたい。立論の方も、それゆえ、客観的・抽象的というよりは主体的・体験的となって、一般的な「老」よりは、わたしにとっての「老」が、ひたすら愚直に開陳されることになる。テーマ自体の〝人間臭さ〟を考えると、これも、避けがたい流れなのかもしれない。

さらに加えて、敬愛するソクラテスの基本姿勢に学んで、なるだけ日常的な具体例で論の裏書きに努めてみたい。立論の抽象化ないし空転による〝不毛〟を避けるためである。

## 〈一〉

さて、老涯に足を踏み入れて切実に感じるのは、頼るべき自分への確たる自信の揺らぎにちがいない。あるいは自身の日常に耳を澄ませて、はたまた他人の行状を目にしてしきりと覚えられるのは ―― 恥ずかしながら ―― 物忘れ、容姿の衰え、粘りの減退、足元の覚束なさ、近親との死別、顧みられなくなる頻度のいや増し、等々だったからである。これらの惨めさたるや、かつての真逆の光景が記憶に生々しいだけに、想定外の驚愕をもたらさずには措かない。

たとえば「物忘れ」―― 若い頃なら、たとえ忘れても、しかるべき筋道を辿って思い出すことが十分にできたし、忘れる頻度も、アハハと笑って済ませる域を出なかったが、今や、筋道を辿っても思い出せるとは限らず、たとえ思い出せても、それに要する時間があまりに長い。大学で教鞭を執る身なら、レクチュアの途中で、わき道に逸れてエピソードに花を咲かせ、いざ本筋に戻る段で、戻るべき地点が今一つ定まらない、といった内心の〝冷や汗〟を、各人が、そっと胸に潜ませているのではないだろうか。

もっと一般的には、誰にも思い当たる赤面（ないしは汗顔）として、パーティやコンパでの知人を前にしたフルネームの度忘れ、等々がある。あまりに親しくて聞き質すのも非礼にあたり、適当に取り繕うものの、内心の動揺は抑え切れたものではない。

あるいは「容姿の衰え」―― 鏡に映るわが顔を眺めてしみじみと漏れるのは、「老けたな・・・」のセリフにちがいない。目許がたるみ、首もゲッソリと筋張り、頭髪は透けて乏しい。かつての自分と重ね合せるからか、各部の〝やつれ〟が目に滲みて、内心の落胆は隠せない。それなりのカバーは心掛けても、根元の〝本体〟が翳ったのでは、おのずと対応も限られてくる。〝益荒男たるもの、外貌になど拘泥しないで心にこそ焦点を絞るべきだ〟といくら嘯いても、われわれの心は、いかに外貌を密かな〝頼み〟としていることか。それを痛感させるのが、容姿の衰えに触れて内心に覚える不穏な〝さざ波〟にちがいない。

人も知るソクラテスは、固有にギリシア的な「カロカガティア（美にして善）」の理想に水を差す端的なアイロニーであった。輝く智慧と怪異な風貌のミスマッチは、反証としての「カコカガティア（醜にして善）」を髣髴させたからである。イエスや釈迦や孔子などの ―― 評伝にみる ―― 堂々たる〝前者ぶり〟を思い浮かべると、ふさわしい中身がふさわしい外観に伴われる〝まっとう〟の、いかに爽快であることか。ソクラテス当人は気にも留めなかったろうが、われわれなら、果たして、どこまでソクラテスでいられることだろう。

## 〈二〉

さらには「粘りの減退」―― いろいろと場数を踏んで要領も呑み込み、卒なく事をこなしていく自信もそれなりに付いたのに、悲しいかな、それを押し進める〝粘り〟に翳りが生じてきた。やや気取って「物事への頓着が薄れて淡泊になった」と言えば聞こえはよいが、要するに〝根気が続かない〟のである。職業柄、気に掛かるテーマは執拗なほど暖め続けて離さなかったのに、どうしたのか、あまり頓着しなくなった。関心が薄れたわけでもなく、引っ掛かりが無くなった、としか言い様がない。向こう意気の盛んな壮年期には、それなりの納得をみないでは収まりそうもない、と思い込んでいた懸案事項が、それなりの納得をみないでも、いつしか収まるようになってきた。これは、果たして〝美徳〟なのだろうか・・・

はたまた「足元の覚束なさ」――おそらくは老齢の誰もが、普通に足を運んでいて、やたら蹴躓く異変に少なからず動顛しているのではないだろうか。足を上げているつもりが、上っておらず、つんのめって踏鞴を踏んでしまうのである。凹凸に富んだ場所ならともかく、平坦な舗道でこれを頻繁に味わうと、いきおい、わが足取りに確たる自負が保てなくなってくる。かつては、わが足に委ねて憚らなかった歩行が、それと意識しなければ、およそ足元も儘ならないのだから。これまでの自動性が〝手動性〟に転じる戸惑いと苛立ちは、日々に繰り返されて、自身の不甲斐なさへの〝腹立ち〟を増幅しないわけにはいかない。

その他についても、あえて事細かに紹介するには及ぶまい。これらは、さながらボディブローのように、じわじわと心自体を苛んで止まない。それに身を晒しながら、果たして、どこまで毅然と自分を保てるか――今でも狼狽の抑え込みに苦慮しているのに、さらに昂じたら、どこかで自尊のブレーキも壊れる気がしてならない。そのような悲惨を目にする残酷だけは、せめて避けたいと切に念願しつつ、だからといって、〝渦中にありながら自覚しない〟恍惚では、それこそ屈辱（？）も甚だしい。

われわれの「老」は、それやこれやで、身に帯びた「もちものの目減り」などと簡単に形容し切れない深刻と無念と苛立ちを、拭いがたく塗り込めているのは否定できない。人生の〝引き際〟として、老齢の身は、表舞台からの退去を――心身ともに――余儀なくされているのだろうか。

## 〈三〉

このような「老涯」の現実を直視すると、そのような「老」をわが人生にどう位置づければよいのか、それは果たして、あらずもがなの〝無用〟でしかないのだろうか、と問わないではいられない。そうした問いは、おそらく、かつて『敦盛』に詠われた「人間五十年、下天の内を比ぶれば・・・」の時代なら、異例の高齢者を除いて、大方の関心を呼ばない〝雲の彼方の存在〟でしかなかったろうが、高齢化社会を生きる今日の大半には、異例の早逝者を除いて、切実かつ深刻な〝わが問い〟として無慈悲な牙を剥いているのは否めない。

かつては、誰しもの垂涎の的であった「長く生きる」も、あまりに度を越して「生き過ぎ」に近くなり、むしろ「死ねない」と等置されたのでは、万事が、極楽色の〝闇絵〟の様相を呈してくる。そのような晩年の〝惨めと無念〟にどう対処すればよいのか。ある研修会の席上、敬愛する恩師はこう口にされた。年を重ねる毎に、この状況はさらに昂じてくるが、ジタバタと抗うのでなく、そうした自分を、むしろ苦笑いを交えて〝揶揄する〟ほかはあるまい。いやしくも自尊を保とうとすれば、おのれを揶揄する「アイロニー」を措いて、拠るべき道は見当たらないのだから、と。その含みの重さに、しばし声を忘れたのは今も記憶に新しい。

ところで、おのれを揶揄する「アイロニー」という晩年の構えの効力は、果たしてどこまで及ぶのだろうか。「生き過ぎ」から嘗める数々の惨めと無念が、まさしく「惨めと無念」として、ありありと実感されている間はともかく、そもそもの〝心〟が、これも自覚できないまでに衰微したなら、どうか。痴呆が進んで恍惚化した状態、を思い浮かべているわけである。

いざ恍惚に入ると、なるほど当人は惨めと無念の埒外にあるだろうが、その光景を痴呆以前に思い浮かべると、あまりの体たらくに、とうてい自尊の心が耐えられそうもない。だから、そっとこう問わないではいられない――まっとうに人生を送っていれば、このような悲惨に身を晒さ

ずに、しかるべく旅立てるのだろうか、と。はたまた、たとえチョイ悪はあっても、トータルに眺めて〝お天道様に恥じない〟と実感できる面々なら、それなりに、神仏のご加護を期待してよいのだろうか、と。この点が、目下の気に掛かって仕方のない〝最たる一つ〟と正直に告白したい。

それにしても、この世には〝早逝〟の痛ましさも〝生き過ぎ〟の惨めさもあまた目にされて、まっとうに生を終えるという本来の姿（？）は、おそらく半数にも満たないだろう。これも、確率の面では十分に自然ながら、人間的生の次元では、それで済もうはずもない。人間たるもの、何事につけ、得心のいく理屈付けを施さないでは収まらないように仕組まれているのだろうか。「早逝」にしろ「生き過ぎ」にしろ、はたまた「まっとうな死」にしろ、ともに、人間の目に映った光景にすぎず、神仏の次元では、すべてが〝天寿〟として括られてよいのだ。たとえばギリシア悲劇のオイディプス王にみる〝悲惨な運命〟のように、等々と・・・

このように考えると「死」も、人間的次元では、忌避されるべき〝無（ないし虚）〟よりは、ある種の〝救済〟の位相を浮かび上がらせてくるかもしれない。およそ物事には始まりがあるように、その終りも無いはずはなく、ゆえに問題は、あまりに早すぎるか・あまりに遅すぎるかにあって、時宜に叶った死は、やはり〝得がたい救済〟というほかはない。顧みれば、細川ガラシャ夫人の辞世にも――少し趣は異なるが――こう記されていた、「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」と。ふさわしい〝散り際〟を訴えた一例と解しておこう。

## ＜四＞

完全な痴呆に陥って〝恍惚〟の只中に腰を落ち着けた末期老人はさておき、そこに至る数歩前の後期老人に限ってなら、老いの効用として、



果たしてどのような利点が思い浮かぶだろうか。この世の事柄であるかぎり、どこから眺めてもマイナス一辺倒といった極端は考えがたく、すべてが、明と暗・光と影の両面を持ち合わせないわけはないからである。そのような〝明〟（ないし〝光〟）の一つに、＜はじめに＞でも少し触れた「ざっと古希を過ぎると、各人の心境にも変化が生じて、ひとは、これまでの〝人の声〟よりは〝神仏の声〟がいっそう気に掛かり出すのではないだろうか・・・」を挙げておこう。

これの内実をめぐっては、すでに、こう解説しておいた。

一応は現役を済ませ、リタイアの境遇に身を委ねて日々を重ねていると、ざっと古希前後で、わが心境に思わぬ差が生じてきた。残された時間の目減りが意識され、頭髪の薄れさながら、かけがえのない時間をどう用いるのが悔いを残さない営みなのかに、おのずと思いが深まったからだろうか、しきりと、今のわたしのこの行為を、周囲の連中はともあれ、神仏ならばどう眺められるであろうか、と問わないではいられなくなったからである。あるいは、今は亡き父母（ないしご先祖）は、これを目にして、果たして、寂しげにそっと顔を曇らせないであろうか、と。

さらには、こうも指摘しておいた。

振り返れば、残された実働時間もそろそろ十年を切りはじめた。もはや世間を気にするより、自身の心に忠実に、偽りのない満足度に軸足を置かないわけにはいかないな――これが、ごく素直に得心されたからであろうか、爾来、本当に意味がある〟と思われる〟ことの方を優先する、というスタイルが、かなりダイレクトに顔を覗かせるようになった。

以上は、わたし個人の〝胸の内〟のあからさまな吐露であったが、わ

たしに実感できる「老」の利点は、目下のところ、これを措いてない。生きる上で〝ケレン味〟が薄れて、いらざる逡巡や迷いも減り、生き方そのものが、単刀直入となってきたのである。あるいは、これまでと比べて〝自身への言い訳〟をさほど必要としなくなった、とでも語っておこうか。

やるべきことには、あまり臆せずに手を染めて――それなりの策を講じつつ――しかるべく汗を流し、成否の方は、全体の流れにお任せしてさほど拘らない。いささか面映ゆいが、ここ最近、これが、少しは〝板に付いた〟気がしてならない。それもしかし、心身両面での――今程度の――はたらきが保証されての話なのだろうが・・・

## ＜五＞

これと並行して、なぜか最近、「Beruf」の発想が心を掠めて仕方がない。ようやくにして「自分を超えた何ものか」に思いが及んだ、おのずからの所産であろうか。

ひたすらに利潤を追い求める資本主義が〝わが世の春〟を謳歌する以前、生活時間の大半を占めた勤労は、世にいう〝パン（日々の糧）のための生業〟という面に加えて、職業・仕事のドイツ名にあたる「ベルーフ（Beruf：召命）」の意味もしっかりと握っていた。額に汗する勤労（ないし、その舞台である職業）は、大いなる神がわたしを配属された〝持ち場〟にほかならず、ここを足場に流せる限りの汗を惜しまずに流すのが、神の呼びかけに応える〝まっとうな道〟でもある――これが「職業＝召命」の発想といってよい。

このような「職の二重性」を心に留めるなら、みずからのポストで具体的な仕事に打ち込むにも、そもそものポストは〝わがもの〟で、どう扱おうと文句を言われる筋合いはない、などの僭越きわまる「オーナー意識」は影を潜めて、替わって浮上するのは、ほかでもない、このポストも大いなるもの（＝神）から託された〝借り物〟にすぎず、それゆえ、貸し主の要望に応えて立派に代役を務め上げるのが事の本筋なのだ、といった「エージェント意識」にちがいない。後者はしかし、単にポスト観のみに留まるわけではない。

考えてみれば、目下のポストに加えて、われわれの財産や子供、果てはわが身体や才能に至るまで、心底から〝わがもの〟と称して構わないものが、果たしてどれだけ見当たるだろうか。これらはすべて、掛け値なしの「持ち物」と思われていながら、その実、来歴の方に目を向けると、わが手のみで獲得した、とはとうてい口にし辛いだろうからである。子供を例にとっても、なるほど、わが子は〝自分で儲けた〟かもしれないが、そこに、果たして〝天から授かった〟の一面が認められないのか否か。望んで確実に得られるならともかく、必ずしもそうとは限らないリアルな現実は、はるか昔から口の端に上ってきた「子は授かりもの」のセリフを、かなり強力に裏書きしていたからである。このような点は、みずからの財産にも、身体にも、ひいては才能にも広く当てはまるにちがいない。

人も知るプラトンは、最晩年の大作『法律』において、「われわれ生き物はすべからく〝神の操り人形〟と考えられてよい」（六四四D）と口にしている。人間＝神の操り人形？？――これの意味するところは、前後の文意から推して、人間＝神の無聊を慰める〝戯れの玩具〟いうよりは、むしろ、神の手になる諸種のメカニズムを内蔵した〝精密人形〟にいっそう近い。人間の内部には、さまざまの情念が複雑に張り巡らされ、その様は、あたかも傀儡を動かす腱や弦をしっかり連想させたからである。そのような操り人形は、神の手で巧みに操作され、それと気づかぬまま

に神の意を体現して忠実に遂行するから、まさしく、神の――戯れならぬ――真面目な玩具と言い換えられてしかるべきかもしれない。だからであろうかプラトンは、あえてこうも付け加えた、「すべての男女は、それゆえ〝操り人形〟という役割を守って、できるだけ見事な遊びを楽しみながら、その生涯を送らなくてはならない」（八〇三C）と。

## ＜六＞

プラトンにならって「人間＝神の真面目な玩具」とイメージしたなら、そうした人間の手で繰り広げられる〝歴史〟も、大きくは「見えざる神の手」に巧みに介入された所産となって、人間たるもの、さながら「歴史の玩具」といった感がしないでもない。

たとえば、戦国の覇者・織田信長――当人は、なるほど風雲に身を委ねて戦国の世を疾駆し、天下を手中に収める一歩手前で、無念にも「天下布武」の旗を降ろさなくてはならなかった。その凄まじい足跡は、当人の意思で自己裁量的に刻まれたというよりは、どちらかというと、歴史の求めに応じて「歴史の尖兵」をひたすら個性的に務め上げた結果、といったイメージを抱かせないだろうか。明らかに信長以上の器を誇りながら、甲斐の英雄・信玄は――あまりに都から遠い地理的条件や、隣国で睨みを利かす宿敵の謙信に大きく足を引っ張られたとはいえ――つまるところ、領国の統治に卓抜の手腕を揮うだけに終わった。双方を並べると、前者は〝歴史の玩具〟に積極的に選ばれ、対して後者は、それに漏れ出た感がしないわけでもない。

さらに登場させたいのは、イタリア・ルネッサンスの巨匠ミケランジェロである。この芸術家は、巷の伝承に耳を貸すなら、どうして傑作（＝彫像）をそうも次々と生み出せるのかとパトロンに問われ、このわたしは、自身の想いを大理石に託すのでなく、石の中に微睡んでいる像が「お願いだから刻み出して貰えまいか」と訴える声に合わせて、ひたすらノミを揮うにすぎない、と答えたとか・・・。みずからの腕を存分に揮った集大成として、この像（たとえばピエタやダビデ像）が生み出されたのでなく、像からの呼び掛けに応じて無心に腕を動かす中で、むしろ、像の方からこちらに歩み出てきた、と形容すればよいのだろうか。

おしなべて芸術家は、華々しい〝創作の徒〟よりは、むしろ〝ミューズの下僕〟とイメージされるべきかもしれない。友人の音楽通から小耳に挟んだ処によれば、天才の名を恣にしたモーツァルトは、自在にメロディーを操る〝華麗な音の魔術師〟として世に名高いが、その実、生み出してくれと嘆願するメロディーの訴えに責め苛まれて、いささかの休息も儘ならない〝憐れなミューズの奴隷〟と捉えられた方が、いっそう実態にも叶っているらしい。かなり奇を衒って、斜に構えたパラドックスの印象は拭えないが、それなりの説得力はなくもない。モーツァルト自身も、先に紹介した「歴史の玩具＝信長」とその軌を一にしていたからである。

## ＜おわりに＞

以上、かなり自在に想像の翼を羽ばたかせてみたが、このような想念にごく素直に浸れるのも、老涯の利点（？）の一つではないのだろうか。そういえば、プラトンの『法律』で「アテナイからの客人」が、今風の若者を戒めて口にしたセリフが改めて浮かび上がってくる。

若者よ、君はまだ若いのだ。だが、時が経つにつれて、いま抱かれている今風の考えの多くは、真反対のものに変わって行くだろう。だから、この上なく重要な事柄について判断を下そう

とするなら、それまで、じっと待たなくてはならない。・・・〝神々は存在しない〟という大それた考えを若い時に抱いて、これを持ち続けたまま老年に至った者など、かつて一人もいなかったのだから（八八八B～C）

プラトンが、その存在を問いかけている「神々」を、ここでの「人間を超えた大いなる何か」に置き換えたなら、かれの口にする戒めのセリフは、まさにそのまま、わたしの目下の心境を忠実に代弁していたからである。ちなみに、修験に名高い「大峯奥駈」の一例を紹介してみると――

　　俄々たる峻嶮に富んだ大峯では、山伏仲間の斗擻以外にあまたの登山愛好家もせっせと縦走を企て、事故の類いもあまた報告されていたが、不思議なことに前者では、たとえケガを負っても〝死〟に至らなかったのに、後者では、ざっと年に二～三人の霊がこっそりと弔われていた。山伏仲間は、これを称して「大峰の修験は〝お山に護られ〟ているわけだ」と口にして憚らないが、これ自体、たしかな統計的事実として否定できないものらしい。

　いきおい「見えざる手」を思い浮かべてしまうが、今ではわたしも、そうしないことにむしろ違和感を覚えている。この問題は、広く一般に否定者サイドから「あるなら〝ある〟と存分に論証してもらおう」と舌鋒鋭く詰られてきたが、ならば逆に、肯定者サイドから同じ線に沿って「ないなら〝ない〟と存分に論証してもらおう」と開き直られたら、果たして、どう応答するのだろうか。いずれのサイドも、みずからの立場のまっとうさをポジティブに論証できず、ひたすらネガティブに、相手の弱み（と思われる点）をあげつらうのみだとすれば、勝敗の方も〝痛み分け〟に終わるほかはない。

　「見えざる手」の存否については、論理のレベルで正常に決着のつかない以上、いずれのサイドも同等に市民権を主張でき、各人は、みずからの体験に問いつつ〝存〟ないし〝否〟のいずれに与してもよいことになる。このわたしも、みずからの体験に耳を傾けて、ここでの〝存〟にささやかな一票を投じたい。

　それにしても『三国志』で諸葛孔明の口にした「謀るは人、為すは天」のセリフがしきりと心に浮かんでくる。これは、宿敵・魏との雌雄を決すべく、中原に駒を進めた孔明が、智謀を駆使して、五丈原に近い峡谷に敵将の仲達を誘い込み、火計に訴えて全滅を図ったところ、あと一歩の手前で、折からの豪雨に阻まれて事を成就できなかった際に、天を仰いで漏らした痛恨のセリフにほかならない。孔明は、人為の策では仲達を凌駕したが、天意はしかし、仲達に味方して事は成らなかった・・・

　およそこのように、ひとは、謀りもしないで怠けていてはお話にならないが、かといって、せっせと謀っても上首尾に終わるわけではない。事の成る・成らぬは、天に委ねるほかはなく、ゆえにわが国でも、より一般には「人事を尽くして天命を待つ」とコメントされているが、これは、尽くすべき人事と成就される天命の〝見えざる隙間〟に着目するなら、むしろ「天命を信じて人事を尽くす」と改められた方がいっそう適切かもしれない。

＊　ここに紹介した中身は、一昨年の冬（二〇一九年十二月十四日）、所属する「現代教育研究会」において披露され、いささかの加筆と修正を施して、すでに『国際教育研究所紀要・第三十号』にも掲載されたのだが、もっと広く、さまざまな方面からの囁きを耳にしたくて、あえて転載に踏み切った。〝辛口のコメント〟をどうかよろしく・・・

（本学文学部非常勤講師）